

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370860

研究課題名(和文) ソ連の異論派と西側知識人の越境的連帯を支えるモラリティ：1968年を中心に

研究課題名(英文) Morality to support transnational solidarity between Soviet dissidents and Western intellectuals: Focusing on the year 1968

研究代表者

松井 康浩 (Matsui, Yasuhiro)

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：70219377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ソ連の異論派の活動を支えた西側の特派員や知識人の道徳的立場を解明することを主たる目的とした本研究は、特に、パーヴェル・リトヴィノフの支援者であったオランダ人特派員カレル・レーヴェと英国の著名な詩人スティーヴン・スペンダーに焦点を絞り調査を進めた。彼らの書いたエッセイ、日記、回想録などを分析した結果、レーヴェ、スペンダーはともに過去に共産党に加わるもソ連の現実に幻滅してそこを離れた経験を有し、そのことが、そのイデオロギーの下で言論や表現の自由を奪われているソ連知識人のリスクある行動に支援を行う際の彼らの道徳的基盤を強化していたことを明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at elucidating the moral position of Western correspondents and intellectuals who supported the Soviet dissidents, in particular, a Dutch correspondent Karel van het Reve and a British well-known poet Steven Spender, who were supporters of Pavel Litvinov. As a result of analyzing their essays, diaries, memoirs, and others, both Reve and Spender had their experiences of joining the Communist Party of each country in the past, yet being disillusioned with the reality of the Soviet Union and leaving there. The study was able to clarify that their experiences strengthened the moral position to support the risky behaviors of Soviet intellectuals who were deprived of freedom of speech and expression under the communist ideology.

研究分野：西洋史

キーワード：異論派 モラリティ 1968年 人権 知識人

1. 研究開始当初の背景

1968 年は、世界的な社会運動の噴出により、第二次世界大戦後の政治社会秩序が大きく揺さぶられた画期的な年であった。東側陣営では、チェコスロヴァキアの「プラハの春」とワルシャワ条約機構軍の軍事介入はその年を象徴する事件だが、ソ連の国内をみても、プラハの春にある部分呼応しながら、しかし、それとは別の原因や背景の下で、異論派に代表される異議申し立ての動きが胎動し始めていた。このようなソ連の異論派知識人とその活動に関する研究は、世界的に見れば、市民社会論の観点や帝政以来のロシア知識人論の文脈で相当程度蓄積されつつあるが、日本では、学術的な研究成果に乏しいのが実情であった。

申請者は、20 年以上前に、岡本宏編『1968 年』時代転換の起点』法律文化社 (1995 年) に「ブレジネフ体制下の知識人と市民」を執筆し、異論派知識人が残したサミズダート文書に基づいて彼らの運動に言及したことがあった。しかし、本テーマへの本格的な着手は、この間従事してきたスターリニズム研究に一定の成果が得られ、かつ、基盤研究 (B) 「近現代ロシアにおける公衆 / 公論概念の系譜と市民の主体性 (agency)」(研究代表者: 松井康浩) プロジェクトの一環として、申請者自身が、1960 年代以降の知識人や市民の動き、とりわけ異論派の動向を調査する作業を担当したことが契機となった。

この作業を通じて以下のことが確認できた。すなわち、国外で発表した作品により反ソ宣伝の罪に問われた二人の作家シニャフスキーとダニエルの裁判 (1966 年) を引き金に異論派が誕生し、異論派知識人と西側特派員等との接触がこの時期に始まったこと、そして 1968 年 1 月には、ダニエルの妻、ラリサ・ボゴラズとパーヴェル・リトヴィノフの連名による「世界の公衆へ (To World Public)」と題した国際世論に照準を合わせた初めてのアピールが出されたこと、さらに、同年 8 月 25 日に、ボゴラズとリトヴィノフを含む 7 名が赤の広場に集まり、プラハの春の武力制圧に抗議し、チェコスロヴァキアの改革派に連帯の意思を示すデモンストレーションを敢行したこと等である。ただ、こうした事実の確認だけでなく、新たに次のことを解明できた。すなわち、「世界の公衆へ」のアピールが西側特派員を通じて外の世界に伝えられ、さらにそれが BBC などによるロシア語放送となってソ連国内へと打ち返され、それを聴取したソ連の人々が、アピールをめぐる自身の意見を交えてリトヴィノフに手紙を送ったこと、そして、リトヴィノフとの間で手紙の往復を通じた議論も一部には行われ、いわば、外国メディアを経由して形成された知られざる「公共圏」を析出できたことである。

ただ、未解明の課題も残った。「世界の公衆」に向けてアピールを行う行為がどのよう

な道徳的な確信に基づき、いかなる意味でそれが正当な行為と考えられたのか、という点である。帝政ロシア期から存在し、ソヴィエト体制下でも広く見られた「嘆願」の伝統、つまり「権力者への手紙」を通じた意見表明や異議申し立てはスターリン時代ですら数多く見られたが、自国の権力者にではなく、国境を越えて外の世界にアピールする行為には先例がない。CIA のスパイ、「敵に塩を送る行為」等と当局や一般人から非難が浴びせられる中、異論派は、自身の行為を正当化する道徳的根拠をどのように組み立てていたのか。

また、異論派をサポートした西側特派員や知識人たちは、逮捕や国外追放の危険を意識しながらこの種の支援行為を行ったが、リスクある行為を支えた道徳的立場はどのようなものだったのだろうか。ボゴラズとリトヴィノフによる「世界の公衆へ」向けられたメッセージに呼応する電報を彼らに送った西側知識人の一人、ステイーヴン・スペンダーは、その後、リトヴィノフの提案に基づいて、世界の人権侵害情報を収集・掲載する雑誌 *Index on Censorship* を立ち上げたが、スペンダーは自身の試みを「慈善の行為というだけでなく、インターナショナルな良心を広げていくための一つの方法」と位置付けた (*Index on Censorship*, 4/1, 1975, p. 6)。ここには、良心は国境を越えるものであり、普遍化可能なものとして捉えられていることが窺える。他方、赤の広場デモに参加して逮捕・収容所送りとなったボゴラズは、公判の中で、自国の政府の行動に対抗する彼女自身の「責任」について語り、それこそが自身を抗議行動へと駆り立てたと発言している。

以上は、研究開始前までに得ていた断片的な知見だが、これらの諸点を深め、論点をさらに広げることが必要であり、それを本研究は目的とした。

2. 研究の目的

本研究は、1968 年に最初のピークを迎えたソ連の異論派知識人による人権擁護活動と彼らの国際社会に向けたアピールを主要な題材として、1) 異論派がいかなる道徳的立場に依拠して自身を正当化したのか、2) 異論派の活動をサポートした西側の特派員や知識人が、いかなる倫理的、道義的判断からそれを行ったのか、3) 両者の相互関係と互いの評価はどうだったのか、以上の 3 点の解明を目的とした。東西対立下での「人権」カードを用いた国家間のかげひきや個々人の物質的な利害といった観点ではなく、越境的な連帯活動を支えた東西知識人の「モラルティ」に着目するところに本研究の狙いがある。国民国家の枠組みを超えて共有される道徳や正義が存在し得るのかどうかを考察する国際倫理学の観点を加味した歴史研究の試みとも言い換えられる。

3. 研究の方法

本研究は、研究目的に記した3つの柱への取り組みを順に実施し、3年間で完了させることを目指した。作業手順としては、1年目に異論派サイドの研究に力点を置き、2年目は西側の特派員・知識人サイドの調査にシフトし、3年目で、両者の相互関係や相互評価の問題に取り組みつつ、研究成果のとりまとめに従事することを予定した。

実際に行った研究の方法は、以下のとおりである。

(1) 異論派にかかわる研究動向と資料調査・収集

北海道大学、国会図書館、日本ロシア語情報図書館、京都大学図書館、香川大学図書館などが所蔵する同時代に著された異論派運動に関する研究論文や研究書、ソ連解体直後に実施された共産党裁判に関連して編纂されたアーカイヴ文書の中の異論派関係資料、Radio Liberty/Radio Free Europe が収集した異論派のサミズダート文書などを閲読・複写し、関係する資料基盤の拡大と情報収集に努めた。

(2) インタビュー調査

上記のように、1968年1月に「世界の公衆へ」のアピールを発表した一人、パーヴェル・リトヴィノフ氏へのインタビューを実施した(平成27年1月にスカイプ経由で、28年3月には氏が在住するニューヨークで)

(3) アムステルダム国際社会史研究所での資料調査・収集

1967-68年にモスクワ特派員を務め、リトヴィノフの活動を支援したオランダ人研究者のカレル・レーヴェが、68年8月(チェコ事件直前)に帰国した後設立した「ゲルツェン財団」(異論派のサミズダートを出版した)の文書が国際社会史研究所のアーカイヴに所蔵されており、その調査を行った(平成27年10月と29年3月)。

(4) オックスフォード大学ボドリアン図書館での資料調査・収集

リトヴィノフの支援者の一人であるステイーヴン・スペンダーの個人アーカイヴが同図書館に所蔵されており、その調査を行った(平成29年3月)。

(5) レーヴェやスペンダーの著作やエゴ・ドキュメント(回想録、日記など)の分析

4. 研究成果

本研究を通じて以下のことを解明することができた。

(1) 異論派の活動を支える道徳的基盤

ソ連政府の政策や行動(とりわけプラハの春への軍事介入等)に対する「恥」の観念が異論派の間で広く共有されており、例えば、

軍事介入に抗議してモスクワの赤の広場でデモンストレーションを行った一人、ナタリヤ・ゴルバネフスカヤは、「恥」をキーワードにした詩作を残している。また、ソ連の政策に同意していないこと公然化する個人的な「責任」があることもしばしば強調された。

(2) 西側支援者の道徳的基盤

本研究では特に、リトヴィノフと関係が深かったカレル・レーヴェとステイーヴン・スペンダーに絞って研究を進めた。彼らに共通するのは、共産主義への傾斜と共産党への入党であり、かつそこから離れた経験である。レーヴェの父親もオランダ共産党員であったし、調査の結果、ゲルツェン財団の住所となっていたレーヴェの住居には、以前、オランダ共産党の本部が置かれていた。しかし、40年代末までにはレーヴェは共産党を離れている。同様に、スペンダーも、スペイン市民戦争に際して対ファシズムを強く意識するなかでイギリス共産党に入党し、スペインへも取材に出かけている。ただその課程でソ連に幻滅し、党を離れた。冷戦中の1949年にはアーサー・ケストラーらとともに、*The God that Failed*(邦訳『神は躓く』)を刊行し、共産党に傾斜した理由とそこからの離脱の理由について自省的な文章を残している。

なお、この書物に文章を寄せた6人の知識人の一人、ルース・フィッシャーの言葉「誰にも自身のクロンシタットがある」は、共産党体験を表す際にその後しばしば用いられた。クロンシタットは帝政以来の軍港であり、その兵士がボリシェヴィキ体制に幻滅して蜂起し、弾圧された事件で知られている。つまり、党を離れた人物には転機となる事件がある、といった含意である。レーヴェも、ゲルツェン財団にかかわる『クリスチャン・サイエンス・モニター』紙(1972年4月4日)のインタビューの中で、この言葉に言及している。

以上のような共産主義の経験は、今なおそのイデオロギーの下で言論や表現の自由を奪われている異論派の活動を支援する重要な背景をなしていた。とりわけ、スペンダーの場合には、その要因は見逃せない。『神は躓く』の後、1950年に創設された反ソ的西側知識人の集まりである「文化自由会議」のメンバーとなり、その機関誌の一つである『エンカウンター』の編集に従事したが、1966年にその雑誌がCIAの財政的支援を受けていたことに衝撃を受け、1967年に編集者を辞任している。その直後に、リトヴィノフらのアピール「世界の公衆へ」発表されると、それを支持する行動をいち早くとったのがスペンダーであった。すわなち、エンカウンターでの挫折経験を払拭するための新たな大義を、異論派支援の活動の中に見出したものと思われる。

(3) ゲルツェン財団の活動及びスペンダー

が組織したWSIと *Index on Censorship* の活動の概要

国際社会史研究所が所蔵するゲルツェン財団のアーカイヴ調査を実施したことにより、この財団の活動のアウトラインをつかむことができた。異論派のサミズダートをまずロシア語で出版し、英語をはじめとした各国語に翻訳する出版社に著作権を譲ることを通じて得られた資金を異論派の財政的支援にあてる活動を展開したことがわかった。

また、スペンダーは、リトヴィノフからの返事に書かれていた支援要請にこたえて、1971年、「作家学者インターナショナル(WSI)」を組織し、その機関誌として世界各国の人権情報を伝える雑誌 *Index on Censorship* の発刊をはじめ(現在でも刊行が続いている)、ソ連の異論派支援にとどまらず、グローバルな人権規範や実践の確立に一定の貢献をなしたことがわかった。

以上は今後さらなる調査・分析を必要とするが、本研究は、東西知識人の交流を人権規範・実践のグローバル・ヒストリーにつなげる端緒的仕事に位置付けられ、その意味で、学術的に意義あるものと考えられる。

(4) パーヴェル・リトヴィノフのライフ・ヒストリー

本研究を通じて、とりわけ、リトヴィノフ氏への2度のインタビューを通じて、異論派としての活動はもとより、1974年に国外追放となりニューヨークに移住して以降の彼の生活と活動についても多くの情報が得られた。リトヴィノフを軸として、そこにレーヴとスペンダーの異論派支援活動をからめた著作の構想を固めることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

松井康浩、実証主義とテキスト主義を超えて 歴史研究者は保苅実から何を得たか、日本オーラル・ヒストリー研究、13号、2017年(印刷中)、査読無

[学会発表](計 2 件)

松井康浩、実証主義とテキスト主義を超えて 歴史研究者は保苅実から何を得たか、日本オーラル・ヒストリー学会、2016年9月3日、一橋大学(東京)

松井康浩、ソ連の異論派と西側支援者を結ぶ越境的モラルティ エゴ・ドキュメントからグローバル・ヒストリーへ、七隈史学会、2016年9月24日、福岡大学(福岡)

[図書](計 2 件)

Yasuhiro Matsui, Palgrave Macmillan, Yasuhiro Matsui ed., *Obshchestvennost*

and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society, 2015, pp. 1-15, 109-127, 198-224.

松井康浩、岩波書店、ロシア革命とソ連の世紀、全5巻(松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦、中嶋毅、松井康浩編)、2017年(印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 康浩 (MATSUI Yasuhiro)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：70219377